

# 第3分科会

## 研究主題

かかわりあって、  
 ともに高めあう体育科の学習  
 —「自己」と「教材」と「仲間」との  
 『豊かなかかわり』を生み出す体育学習を求めて—

松江市立来待小学校

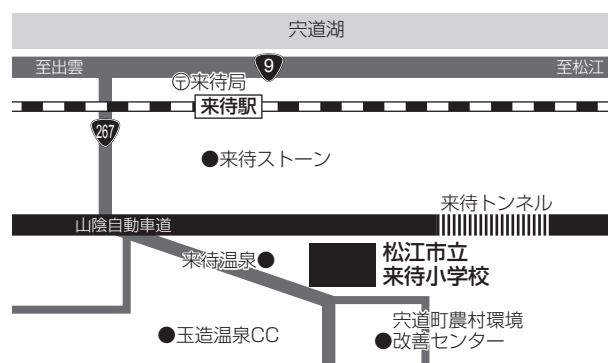
## 日 程

9:00	9:30	10:15	10:30	11:15	11:25	11:35	12:15	13:15	13:25	13:45	14:10	14:50	15:00
受付	公開授業① (5年)	移動・休憩	公開授業② (2年)	移動・休憩	研究概要説明	授業協議	昼食・休憩	開会行事	研究発表	研究協議	指導講評	閉会行事	

## 公開授業案内

	学年・単元名	会場
公開授業①	5学年・跳び箱運動	体育館
公開授業②	2学年・シュートゲーム	体育館

## 学校所在地図



## 交通機関

バス：シャトルバス 運行  
 松江駅より30分

タクシー：JR松江駅からおよそ30分（5000円程度）  
 JR来待駅からおよそ10分（1000円程度）

## 学校概要

学校名称	鳥根県松江市立来待小学校		
校長氏名	石富 修		
学級数	8学級		
生徒数	144名		
所在地	〒699-0405 鳥根県松江市宍道町上来待125		
電話	0852-66-0051	F A X	0852-66-0052
U R L	<a href="http://www.kimachi.matsue.ed.jp/">http://www.kimachi.matsue.ed.jp/</a>	E - m a i l	school-e@kimachi.matsue.ed.jp

### 【学校紹介】

本校は、明治6年に開校し、昭和48年に100周年記念式典を挙行した伝統のある学校であり、明治40年以降の卒業記念写真が、揃えて掲示されている。平成17年3月に宍道町が松江市に合併したことに伴い、松江市立来待小学校となった。松江市の西部、宍道湖の南西に位置している農山村地域であり、主要産業である農業をはじめ林業、畜産業のほか宍道湖では漁業も営まれている。また、特産の来待石は石材加工品として広く各方面に移出されている。

平成21年5月1日現在の本校の校区の面積は24.12平方キロメートル、人口は3,282人、世帯数は769戸である。

昭和31年に、日本体育指導者連盟より保健体育優良校として全国表彰、平成4年には、学校体育研究連合会より保健体育優良校として全国表彰、平成6年には学校安全文部大臣表彰を受けるなど、体育・安全教育に熱心に取り組んできた実績がある。

学校裏山は、「なかよしコース」として整備し、トレーニングコースとして活用している。また、「太陽も風も友だち 来待っ子」を合言葉に、自然の中での教育活動を大切にしている。地域の方の協力を得て、米作り、野菜作り、しじみ漁、来待川調査、来待石彫り体験など、地域の素材をいかした学習に積極的に取り組んでいる。平成15年に誕生した「来待っ子太鼓」は、地域活動に貢献している。

#### <教育目標>

人間性豊かであり、未来に向かってたくましく生きる子どもの育成

(人間尊重の精神を全ての教育活動の基底に据えて、知徳体の調和のとれた児童の育成)

#### <めざす子ども像>

- よく考え、進んで行う子ども
- 最後までやりぬく元気な子ども
- 仲よく助け合う明るい子ども

#### <今年度の重点>

- ①「生きる力」を育むための「確かな学力」を育成する。
- ②「信頼される学校」づくりをめざして、特色ある教育活動を展開する。
- ③安全教育、健康教育を推進する。
- ④教育環境を整備し、協働体制を確立する。

#### <今年度のテーマ>

みんなで声をかけ合い、考えを出し合って、みんなが楽しい学校をつくろう。

## 研究主題

# かかわりあって、ともに高めあう体育科の学習 ー「自己」と「教材」と「仲間」との 『豊かなかかわり』を生み出す体育学習を求めてー

松江市立来待小学校

## 1 主題の設定について

### (1) 児童の実態から

#### ①学校教育の今日的課題

近年の経済的な発達や家庭や地域の変化は、子どもたちの運動の機会、運動の種類、質などを大きく変えている。メディア接触の増加や外遊びの減少、少子化、核家族化による集団遊びの機会の減少などにより、子ども達の体力の低下、運動に対しての根気強さと主体性の低下、運動能力の低下などが起きている。

学校外での遊びや幼児期に獲得される運動能力の上に考えられていた小学校の体育が成り立ちにくい状況や、学校体育以外には積極的に運動することがほとんどない子どももかなりいるという現実もある。社会体育に所属し、運動量が多い児童との二極化も出てきている。

#### ②来待小学校の児童の実態

本校は松江市郊外に位置し、山林や来待川、宍道湖など豊かな自然に囲まれている。学校教育や地域の行事に協力的な家庭がほとんどで、食をはじめとする子どもの健康に対しても意識が高い。

本校は全校児童数144人と規模が小さく、お互いの様子をよく知っている。追跡ハイクやなかよし遊びなど、8、9人の縦割り班で活動することも多く、同じ学年に限らず、子ども同士は仲がよい。

業間、昼休みには校庭や体育館で積極的に体を動かす子が多く、社会体育にも積極的に参加している子が多い。体育に関しての校内でのアンケートでも、体育の授業が好きと答えた児童が多い。また、家庭の協力を得て、食事や睡眠などの生活リズムもできている。

児童の地域や家庭での運動経験に関しては、全国的な傾向と同じ様子が見られる。環境的には恵まれているが、外遊びそのものが廃れた今では地域の環境を生かすにいたっていない。また、同学年の友達と家の中で遊ぶことが多く、遊びの幅も広がらないという実態がある。

運動能力に関しては、スポーツテストの結果から、個人差が大きく、学級の中でもかなりのばらつきがある。

本校児童の「自己」「教材」「仲間」とのかかわりについては次のような課題がある。

#### ・「自己」に関わる課題

積極的に運動に関わる児童と、受身になっている児童がおり、個人差や二極化の原因ともなっている。また、ボール運動は好きだが陸上は好きではないなど、領域による好き嫌いがかなりある。

#### ・「教材」に関わる課題

運動能力の偏りとも関係して、不得意な領域での知識、技能、判断力の不十分さが見られる。鉄棒の逆上がりやマットなどの技能が十分でない児童や、ゲームやボール運動での判断力が遅い児童が見られる。

#### ・「仲間」に関わる課題

児童同士は仲がよく、学習も効率的に進むが、常に同じメンバーでの学習が続くため、固定化された人間関係から生じる協同的な学習への意識の低さや、個々の様子を知っていることが

逆に伸びを限定してしまっている場面が見られる。

## (2) めざす児童像と研究主題

本校では、体育科としてめざす児童像と「自己」「教材」「仲間」とのかかわりを次のように考えた。

「自分から積極的に取り組む子」→「自己」

「運動の楽しさを知り、必要な知識や技能、判断力を身につける子」→「教材」

「仲間とともに高めあう子」→「仲間」

体育科の学習で3つのかかわりについて追求する中でめざす児童像の実現を図ろうと考え、研究主題を「かかわりあって、ともに高めあう体育科の学習」とした。

全ての児童が『今の自分』を知り、魅力的で価値ある教材と出会い、わかる・できる喜びを感じ、友達とかかわりあいながら『わかる自分、できる自分』を見つけたり、作り出したりする体育学習をめざしたい。その取り組みの継続的な実践を通して、児童自らが進んで考え、判断し、解決していく力や、友達とかかわり合いながら互いに高めあう力をはぐくむことができるであろう。そのことは生涯にわたって運動に親しみ、日常的に運動やスポーツに取り組み、健康で安全な生活づくりをしようとする児童の育成につながると考える。

## 2 副主題の設定について

研究実践をより具体的に進めるために副主題を～「自己」と「教材」と「仲間」との『豊かなかかわり』を生み出す体育学習を求めて～とした。

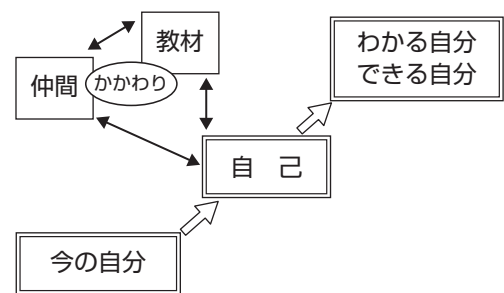
児童が教材と出会い、『今の自分』から『わかる自分、できる自分』へと成長するために、学習課題を解決していく過程で、自己や教材、仲間とのかかわりが重要となる。それら3つのかかわりを豊かにしながら、より体育学習の質を上げていくことが一人ひとりの学びを深めると考えた。

3つの『豊かなかかわり』とは、

「自己」とのかかわり…自らの現在の段階を知り、めざす方向を定め、自己課題の解決・追求の過程で『わかる自分、できる自分』を発見すること

「教材」とのかかわり…魅力的な教材と出会い、その教材の特性や楽しさに触れ、向き合う中で、自分にとっての運動や健康の価値に気づくこと

「仲間」とのかかわり…自己の課題を解決・追求していこうとする過程で友達のよさに気づいたり、アドバイスし合ったり、励ましあったりすること



## 3 研究目標

「かかわりあって、ともに高めあう」児童を育てるために、「自己・教材・仲間」との豊かなかかわりを生み出す体育学習のあり方について、実践を通して明らかにする。

## 4 研究仮説

### (1) 基本仮説

体育科の学習の中で「自己・教材・仲間」との豊かなかかわりを生み出すための手立てを工夫すれば、「かかわりあって、ともに高めあう」児童が育つであろう。

### (2) 具体仮説

①子どもが『わかる自分、できる自分』を見つけたり、作り出したりするためには今の自分を知るとともに適切な自己課題を設定し、自己評価をしていく工夫が必要である。

②子どもが教材の特性や楽しさに触れ、運動や健康の価値に気づくためには、運動特性に応じた適

切な単元構成の工夫や指導過程の細分化、教材の工夫が重要である。

- ③子どもが自己の課題を解決・追求していこうとする過程でより協同的な学習にするためには話し合いや発表の場の工夫が必要である。

## 5 研究内容

- (1) 「子どもと自己とのかかわり」
  - ・『今の自分』をより客観的に知る工夫
- (2) 「子どもと教材とのかかわり」
  - ・運動特性や子どもの実態に応じた単元構成の工夫と指導過程の細分化
- (3) 「子どもと仲間とのかかわり」
  - ・友達の動きを見る視点の明確化と場の工夫
  - ・こつやポイント、賞賛、感想等の発表や作戦タイムなどの話し合いの場の工夫

## 6 研究の実際

- (1) 「子どもと自己とのかかわり」に焦点を当てた実践

授業実践例 第6学年 「ハードル」より

### ①自己とのかかわりについて

本単元ではガイダンスの後、50m走の記録をとり、その記録から目標タイムを割り出す。

フォームの学習の内容としては、たくさんの要素があるが、基本的な「遠くからの踏み切り」「振り上げ足伸ばし」「抜き足」の3つにしぼって進め、技能の習得につなげたい。そのために自分のフォームをより客観的に知ることができるようにして学習を進められるように工夫した。

《映像遅延装置》実際に走っている自分の姿を見ることが難しいため、フォームの修正はなかなか難しい。そこで数十秒遅れて映像を映し続ける映像遅延装置を使う。これにより自分のフォームを客観的に見たり、モデルとなる友達のフォームと比較したりすることができるであろうと考えた。

《振り返りカード》授業についての振り返りカードを書くことで、学習課題に対しての自己評価とともに、自分のめあてを立てることができるようにする。また、毎時間障害走の記録をとることで意欲付けを行ったり、フォームとの関係を見つけたりさせたい。

《意識付けにつながる教材》自分の足を着くところに印を付け、インターバルの場所がねらいやすくなるようにしたり、ハードルの上にウレタン製の板を付けたりして、「振り上げ足伸ばし」「抜き足」などを意識しやすいようにする。

### ②指導計画（第7時）

時間	1	2	3	4	5	6, 7	8
学習内容	50m走, 障害走記録, 学習概要把握	自分に合うインターバルの選定	3歩のリズム	遠くからの踏み切り	振り上げ足伸ばし	抜き足	個人課題への挑戦記録会

### ③授業の実際と考察

《自己とのかかわり》映像遅延装置については、感想でも「今日の練習では抜き足を意識して横に開けたけど、上がったままですぐには下に下ろしていなかったもので、今度からは抜き足をお腹に着けるようにして、すぐに下に下ろすようにしたいです。また、ハードルぎりぎりに低い姿勢で跳べたのでよかったです。自分が跳んでいるのをテレビで見ると、どこを直せばいいのかがよく分かるのでいいと思いました。」といった記述が見られる。ただ、校庭での授業であるため、モニターが見つらいのと、電源コードやハードルのコース取りの関係からモニターをスタート地点に置いたため、走り終えてからすぐもどらなければいけなくなってしまった。指導計画の中

で、有効な利用の仕方をもっと考えていく必要があった。

また、映像遅延装置を使うと、子どもどうしのアドバイスが少なくなりました。ハードルにつけたシート、友達からのアドバイス、映像遅延装置などの手立てを考えたが、感想では、子どもによって自分にとって有効であったものはそれぞれちがっており、複数の手立てを講じた中から子どもが自分で選べるように設定していくことも考えられる。自己とのかかわりをねらう学習をしたが、3つのかかわりをとらえる上で、それぞれのかかわりを単独で考えるのではなく、3つの円のベン図として考え、重なり合った部分や、子どもの実態や特性に応じて子ども自身が手立てを選ぶことができればよいのではないかと考える。



《振り返りカードと単元構成》振り返りカードを毎時間書いていたが、その記述の中に、学習を積み重ねていくとそれまでに学習したことを忘れてしまうという感想もあった。

「足があまり開かず大変でした。少しでも気をつけようと集中してやると、そのことでいっぱいになって跳ぶのが難しくなりました。3歩のリズム、抜き足、着地、スピード、距離の全部をやるのはとても難しいです。でもシート（ウレタン製の板）に足を着けることができたので、これからはアドバイスを聞いてしっかりやりたいです。記録は前より1秒伸びました。でも、まだいい跳び方というのができていないので、そこをもっと練習して10秒目指してがんばりたいです。」

子ども達は、いろいろなことを学習する中でかえって混乱することもあるが、今の自分をリサーチしながら自己課題を設定し自己評価を繰り返していくためにも、振り返りが大切であることが分かった。「今までは抜き足や振り上げ足のことを考えてばかりで、バランスを崩していたけど、だんだん練習していくうちにこの『こつ』が自分のフォームになっていってとても跳びやすくなりました。」といった感想も見られた。

## (2) 「子どもと教材とのかかわり」に焦点を当てた実践

授業実践例 第4学年 「鉄棒運動」より

### ①教材とのかかわりについて

- ・鉄棒運動の効果的特性…独自の技術とその系統性を知り、自分のレベルを知って、どう練習していけば良いか、段階的な練習方法が身につく。
- ・児童の実態…自分から進んで休み時間に鉄棒に取り組む姿が見られず、鉄棒が大好きな児童は少ない。事前のアンケート調査では、「すき、まあまあ好き」…(17人)「あまり好きでない、きらい」…(10人)という結果であった。



逆上がりや腕立て後ろ回りを難なくこなす児童もいれば、布団干しや足ぬき回りを怖がる児童もいて、技能的な個人差は大きい。

以上のようなことを踏まえ、単元構成や、児童の実態に即した指導過程を工夫して指導を進めていきたい。技能向上のための具体的な工夫は次のようなものである。

- ・明確なスモールステップの提示。
- ・視聴覚機器を活用した、技のポイントの整理。

・共通課題の技につながる下位運動を取り上げる。

## ②指導計画

時間	学 習 内 容
1, 2	オリエンテーション ・鉄棒運動の注意, 約束・技の紹介・自分のできる技を調べる。
3	①できる技を楽しみながら反復したり, つなげたりする。 ・ダンゴムシ, 足抜き回り, 布団干し, とびあがり, ツバメ, ふりおり, 前回りおり ②後ろふりおりのポイントを知り, チャレンジする。
4, 5	①できる技を楽しみながら反復したり, つなげたりする。 ②コウモリふり, おりのポイントを知り, チャレンジする。
6, 7	①できる技を楽しみながら反復したり, つなげたりする。 ②ヒコウキとび, ふみこしおりのポイントを知る。 ③発表会に向けた技の組み合わせを練習する。
8	個々に発表する。

## ③授業の実際と考察 (第7時)

授業では, ポイントを確認した後, コウモリふりおりのスモールステップを自分で選び, チャレンジさせた。毎時間の学習内容のスモールステップを提示することで, 鉄棒が苦手な児童でも自分に合ったレベルの技に挑戦したり, 見通しを持つことができた。また, 技能の高い児童もスモールステップによって高度な技を習得しやすかった。

教材の工夫としては, 子ども同士が, どれくらいコウモリでふれているか判断しやすいように, 放射状の色線を書いた板をぶら下げ, 真横から見させた。「茶色の線まで振れた。」などと友だちに言ってもらい, 自分がどれだけ振れているのか自覚させるのには効果があった。

児童の実態を考え, おり技を中心に学習したのは良かった。またその中でも逆さ感覚を身につける上で, コウモリふりおりにみんなで取り組んだのは良かった。しかし, 逆さになった時に怖さから力が抜けない子もいた。

準備運動段階で逆さ感覚を取り入れた運動をもう少し入れれば良かった。また, いくらポイントが分かっても, 技を体で覚えるためにはたくさんの回数をこなすことが必要である。ゲーム的な要素を取り入れて, 基礎的な動きを繰り返してやっけていけるように指導を工夫する必要がある。また, 楽しさを実感させることで遊びにも繋がるようにしていきたい。

## (3) 「子どもと仲間とのかかわり」に焦点を当てた実践 授業実践例 第1学年 「ドッジボール」より

### ①仲間とのかかわりについて

「ゲーム」領域は, 主として集団対集団で競い合い, 仲間と力を合わせて競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動である。また, 仲間と協力することの楽しさや大切さを学び, 低学年なりの簡単な作戦を考えることが期待できる教材である。



スモールステップの表 (コウモリふりおり)	
1	おやすみコウモリ
2	足ぬき回り前半 (ゆき)
3	足ぬき回り後半 (かえり)
4	両手こもり (ひざをかけて, 両手は鉄ぼうをもって)
5	片手はなしコウモリ (じゃんけんができればOK)
6	両手はなしコウモリ (じゃんけんができればOK)
7	コウモリ手つきおり
8	コウモリで手を前に移動して手つきおり
9	コウモリふり (ドラエモンタッチ)
10	コウモリでふって前に手をつけており
11	コウモリでふってとび箱に手をつけており
12	両わき2人ほじょでコウモリふりおり
13	コウモリふりおりができる
14	コウモリふりおり (よびのスイングを3→2→1とへらしていく)
15	こしかけから, コウモリふりおり (スイングをへらしていく)

事前のアンケートでも、子ども達は全員ボール遊びが好きで、楽しみにしていた。児童の好きだという気持ちを大切に、本単元を通してその気持ちが継続しさらに高まっていくようにするために、友達とかかわりながらボール遊びの楽しさを味わうことができるようにしていきたいと考えた。

〈授業の中での仲間とのかかわりと手だて〉

- ・チームの友達と話し合ったり、作戦を立てたりする場を設定する。
- ・個人やチームの動きを教え合ったり、ゲームの中で生かしたりする。
- ・得点係、タイマー係、審判などチームの中で役割分担する。
- ・チームでまとまって応援をする。
- ・振り返りの時間に感想を発表して、お互いのよいところを伝え合う。

②指導計画

時間	学 習 内 容	
1	オリエンテーション	
2, 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体ほぐしの運動（鬼ごっこ・投げ上げキャッチ・バウンドキャッチ）</li> <li>・ゲーム（転がしキャッチ・まとあて・パス）</li> </ul>	・いろいろなボール遊び
4～6		・転がしキャッチゲーム ・まとあてゲーム・転がしドッジボール
7～10		・パスゲーム・まとあてゲーム ・中当てドッジボール

③授業の実際と考察（第5時「転がしドッジボール」）

授業の中では、チームの友達と話し合ったり、作戦を立てたりする場を設定した。運動量を確保するために、わずかな限られた時間しかとれなかったが、仲間とのかかわりの場は大切であると考えた。

自分たちで考えを出し合い、作戦を実行することで意欲や力がさらに高まっていった。円のコートで転がしドッジボールをした時、「コートの形」と「ボールをよく見て当てられないように動く」という発想から、スーパーファイヤーチームは、「めだまやきをまわる」という作戦を立てた。その作戦を実際に行ってみたところ、動きがよくなりボールに当たるのが少なくなった。チームのメンバーの一人が学習カードの感想に、「ころがしドッジボールで、スーパーファイヤーチームが1いになってよかったです。さくせんもうまくできてよかったです。」と書いている。ゲームが終わってから、「めだまやきをまわる作戦がうまくいったね。」と嬉しそうに話していた。



個人やチームの動きを教え合ったり、振り返りの時間に感想を発表してお互いのよいところを伝え合ったりすることも大切なかかわりの場であると考えた。児童はゲームをしている時も係の役割をしている時も、友達のよい動きを見ているということが分かった。そして、児童の言葉でこつやよい動きなどを言語化して共有すると、意識化につながり個や集団の持つ力を伸ばすために有効であると感じた。

《学習カードより》

「3いになったけど、じょうずにできたし、たのしくできてよかったです。〇〇くんがスピードドラゴンチームとたいけつしていたとき、かわすのがうまかったです。わたしもかわしてみたいです。」

「すりぬけおにごっこがたのしかったです。コーンたおしはさいしよたおれなかったけど、『こ

わこわなげ』と『がいなシュート』を一つずつやったらたおれるようになりました。たのしかったです。」仲間とのかかわりに焦点を当てて学習を進めたが、「ボールを持たないときの動き」という技能に有効に働く「作戦」や「話し合い活動」のあり方についてはまだまだ研究していかなければならないと考える。

意欲を持ち、楽しみながら運動の力を伸ばしていくために、仲間とのかかわりを深める授業を構成していく必要がある。また、系統を踏まえて単元を組み立てていくことが大切であると考え

## 7 研究のまとめ

「かかわり」について、「子どもと自己とのかかわり」「子どもと教材とのかかわり」「子どもと仲間とのかかわり」の3つに分けて考えることによって、子どもの成長や習熟の過程がこれまで以上につかみやすくなった。子どものとらえが細かくできるようになったため、子どもの実態に合わせた指導ができるようになってきた。

### (1) 「子どもと自己とのかかわり」について

《成果》 映像遅延装置などの機器の活用や学習カードでの振り返りなどを通し、「今の自分」をどのようにつかみ、自己評価につなげていくかを中心に取り組んだ。映像や友達からの助言などを有効に組み合わせることのできるだけ客観的に「今の自分」をつかませることができた。これまでの自分と今の自分、あるいはモデルと自分との比較についても、振り返りカードの中で何を振り返るのかを検討することにより、1単元、1時間の学習を構成していくときの指導者のねらいをはっきりさせていくことにもつながった。自己評価だけでなく、相互評価や指導者の評価言によって学習のヒントを得たり、飛躍的に技能が伸びたりする子ども多数見られた。

《課題》 「今の自分」のつかみ方について発達段階や領域によってさらに吟味する必要がある。また、「分かる自分、できる自分」に高めていくために、「今の自分」をどのように評価し、高める方策を立てていくか、さらに検討していきたい。

### (2) 「子どもと教材とのかかわり」について

《成果》 高学年での器械運動では、できる、できないがはっきりすることの多い領域で、段階的に指導を進めていくためのスモールステップを組むことの効果を確認することができた。

低学年でのゲームの学習の中では、ボールを投げることやゲームを成立させるルールや人の動きを理解し、適切な動作ができるように指導していくために、ボールの種類、チームの人数、コート of 広さなどいろいろな条件を組み合わせ工夫することができた。また、単元の構成にも子どもの習熟に合わせて段階的な工夫をしていくことができた。



《課題》 スモールステップを組む際に多くの条件が入ってきたときには、指導過程がかなり複雑になってしまったり、準備する教材が多くなりすぎたりしてしまう傾向がある。できるだけシンプルで効果的な指導過程の工夫が必要となる。

### (3) 「子どもと仲間とのかかわり」について

《成果》 ゲームでは、仲間に対しての励ましやアドバイスなどとともに、チームとしての作戦を作る際に言葉や動作を通してのコミュニケーションのあり方が検討された。作戦タイムや

試合の振り返りなどの話し合いが学習の中でも重要になってくるが、どこに視点を置いて話し合いをさせていくかについて検討することができた。

また、言葉だけでなく非言語のコミュニケーションが体育の中では多くあるが、チームとしてのまとまりが成熟していくにつれて友達の動作の特徴の理解やくり返しの練習によるパターンの理解が仲間とのかかわりの中で大きな部分を占めることも確かめることができた。

《課題》 低学年にとっての「作戦」をどのようにとらえ、話し合いをさせ、運動に結び付けていくかについてさらに検討を進める必要がある。特に「ボールを持たないときの動き」を視点にすえて学習を進めていく必要がある。また、他の領域についても「わかる」「できる」につながる「仲間とのかかわり」について考えていきたい。

## 研究主題

# できる喜びを味わい、共に学び合う子どもの育成 —めあてをもって主体的に取り組む体育科の学習を通して—

松江市立玉湯小学校

### 1 研究主題設定の理由

第48回全国学校体育研究大会鳥根大会では、「明るく豊かな生活につながる体育学習を求めて」を研究主題に掲げ、小学校では「仲間とのかかわりに視点を当てた運動欲求の拡充」を中心にして研究を進めていくこととなった。

本校の児童は、元気で明るく、休み時間はよく外で遊ぶ。男女間、異学年間の仲も良く、互いにかかわりあって遊ぶ姿もよく見られる。また、体育の時間を楽しみにしている児童が多く、授業の中では友達のがんばりを認め合える雰囲気がある。高学年では、地域の社会体育クラブに所属している児童が多く、専門的な技能や知識、体力等が秀でている。しかし、あまり運動を好まず、体を動かして遊ぶことが少ない児童もあり、学校でも家庭でも運動に親しむことへの二極化が見られる。また、苦手な種目になると練習が続かずあきらめてしまう児童が多く、バランスよく運動できる児童は少なくなってきた。

そこで、体育科の学習を通して運動のもつ楽しさに触れ、必要な技能の習得や知識を理解することで自分の力を把握し、個々のめあてをもつことができるようになるのではないかと考える。また、それぞれの運動がもつ特性やよさを理解することで、その運動が好きになり、上達したいと願うようになるを考える。その思いを大事にし、場の設定や友達とのかかわり方を工夫することで、主体的に運動に取り組めるようになるのではないだろうか。

児童が運動をしていて「楽しい」と感じるのは、「できなかったことができるようになったとき」

「記録が伸びたとき」「友達にそれを認められたとき」であろう。友達とかかわり合って学習し、学級集団の中で支え合い、できる喜びを分かち合って伸びていって欲しいと願い、「できる喜びを味わい、共に学び合う子どもの育成」という研究主題を設定した。

### 2 研究主題の捉え

#### ○「できる喜びを味わう」

- ・「できる」ようになってうれしい、楽しい、もっとやりたい。
  - －「技能の習得」「意欲の向上」
- ・「できる」までの過程を大事にする。－「知識・理解」「思考・判断」
- ・友達と喜びを分かち合う。－「意欲の向上」

#### ○「共に学び合う」

- ・同じ学習集団として共に学び、お互いに高め合っていく。
- ・授業の中で教え合う、助け合う、認め合う。そして喜びや楽しさを分かち合う。

### 3 研究目標

- ①体育科の授業において、児童が自ら課題を見つけて主体的にその課題に向かって取り組み、できる喜びを味わい、友達とかかわり合いながら学び合う授業を創造する。
- ②運動に対する興味・関心を高めると共に、体力を向上させるような体づくり運動の取組みを行う。

#### 4 めざす子ども像

☆運動に親しむ子

☆自分のめあてをもって粘り強く取り組む子

☆共に学び、支え合ってみんなで伸びていく子

#### 5 研究の方法

(1) めあてを持ち、主体的に取り組む単元の指導計画のあり方を探る。

○基本とする単元構成

	学習内容・めざす姿	手立て
①課題をもつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題をもつ</li> <li>・自分の力にあった課題を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○課題設定 <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が自ら課題を見つけられるようにカードなどを使用する。</li> </ul> </li> </ul>
②課題に向かって取り組む	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人やグループで練習する。</li> <li>・技能の習得，能力の向上をめざす。</li> <li>・友達と教え合う。</li> <li>・いっしょに練習する。</li> <li>・粘り強く取り組む。</li> <li>・できる喜びを分かち合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○主体的に取り組む <ul style="list-style-type: none"> <li>・場の設定</li> <li>・運動量の確保</li> <li>・ワークシート</li> <li>・練習方法のバリエーション</li> <li>・思考場面の設定</li> <li>・評価</li> </ul> </li> <li>○「わかる」「できる」「かかわる」に視点をおいた学習指導を目指す。</li> </ul>
③成果を発表する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・習得した技能を発表し合う。</li> <li>・できる喜びや運動の楽しさを分かち合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場の設定</li> <li>・評価</li> </ul>

(2) よりよい1時間の学習過程のあり方を探る。

○授業の組み立て・場作り・指導方法の工夫など

学習過程	学習活動	手立て
①体ほぐしの運動 (下位運動)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・しっかり体を動かして下位運動をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主運動につながる下位運動の実施</li> </ul>
②課題提示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の課題をつかむ。</li> <li>・個人やグループのめあてを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題設定の工夫</li> </ul>
③主運動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人やグループで練習する。</li> <li>・友達と教え合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場の設定</li> <li>・運動量の確保</li> <li>・思考場面の設定（発問，指示，映像等を使って）</li> <li>・ワークシート</li> </ul>
④まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の成果を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価</li> </ul>

(3) 運動に対する興味・関心を高め、体力を向上させるような体づくり運動の取組み

○全校なわとび大会

〔大会の内容〕

- ・毎年3学期に実施。
- ・長縄で「8の字跳び」「みんなでジャンプ」を行う。
- ・6年生の短縄によるデモンストレーションを行う。

〔大会当日までの動き〕

- ・健康委員会より「なわとび大会」のお知らせ及びよびかけ。
- ・各学年で練習する（自主的に児童が練習に取り組む場合もある。）

## 6 授業での実践

(2) 5年生「マット運動」

①単元について

〔一般的特性〕

マット運動の技は、回転系と巧技（こうぎ）系に技に大きく分けられる。回転系の技は、前方や後方、側方に回転することを特徴とし、巧技系はバランスをとったりジャンプしたりすることを特徴としている。

陸上運動やボール運動などの多くの運動は、歩、走、跳、投などの日常的な動きを基にして成り立ち、距離や得点の増大、スピードの短縮などの重点が置かれるのに対し、マット運動は逆さまになったり、回転したりなどの非日常的な動きを獲得することに重点が置かれる。非日常的な動きをするが故に、いろいろな技に取り組んだり、新しい動き（技）をできるようになった時には、より楽しさや喜びが味わえる運動であるといえる。また、今できる動き（技）がより正確にできるようにしたり、新しい技に挑戦したり、組み合わせで調子よくできるようにしたりするなど、動きのできばえについても楽しみや喜びを味わえる運動である。

〔児童からみた特性〕

児童にとってマット運動は、いろいろな技に取り組む中で、できなかった技をできるようになったり、より上手にできるようになった時に、楽しさや喜びを感じる運動である。また、技の習得の過程では、友達に補助してもらったり、励ましてもらったりすることがあり、友達との関わりを深められる運動でもある。

しかし、マット運動の技が非日常的な動きを基に成り立っているために、どのように体を動かしているのか分からない場合や怖さを感じる場合もある。また、できばえを問う運動だけに、「できる」「できない」がはっきりと分かるため、できる技が少ない児童にとっては、あまり楽しくないと感じてしまうこともある。

②単元を通しての指導

児童の様々な実態をふまえ、以下のような手だてをして指導にあたった。

【できる喜びを味わうための工夫】

〔運動の特性や児童の実態を生かした学習過程の展開〕

マット運動に対する実態が一様でないことから、単元を大きく二つに区切り、単元の前半を「基本的な回転技や倒立技をマスターする」段階、後半を「身につけた技を使って繰り返し連続技や組み合わせ技に挑戦する」段階と位置づけた。単元の前半では、これまで経験してきた技や新しい技ができるようにマット運動の系統性を考慮して、共通技の学習場面を取り入れた。特に、



本單元では、「側方倒立回転」の学習に重点を置き、指導にあたった。後半では、身につけた技を連続させたり組み合わせたりして児童の創意を生かしながら演技をする活動を取り入れた。  
〔基礎感覚づくりを取り入れた導入の工夫〕

毎時間、授業のはじめには、準備運動をかねてマット運動の素地となる運動を経験する時間を確保した。2人1組での柔軟運動をしたり、腕で体を支えたり、逆さになるなどの基礎的な感覚を少しずつつけながら指導していく。特に側方倒立回転の習得に必要な壁倒立や補助倒立の練習の時間を多く取り入れた。



〔「わかる」と「できる」を一体化した指導〕

視覚に訴える資料を活用し、児童に技のポイントをわかりやすく伝えるようにした。共通技を学習する際には、スマートボードで動画や静止画を写し出し、技のポイントを発見させることができた。また、友達の動きを見てコツを発見する学習も取り入れたことが「わかる」につながったように思われる。さらに、練習の時間をできるだけ多く確保したり、練習の場を工夫させたりすることによって、新しい動き（技）が「できる」ようになったと考えられる。

【できる喜びを味わうための工夫・児童が自ら課題を見つけるための工夫】

〔スモールステップを取り入れた段階的な指導〕

それぞれの技の細かいステップやポイントを示しながら、個別に指導していった。また、特に本單元での学習の重点として位置づけている「側方倒立回転」では、どの段階まで技が習得できているのかが分かる「ステップアップカード」を用いたことによって、児童が課題をより明確にし、意欲的に取り組めたように思われる。

【友達とかかわりながら学習するための工夫】

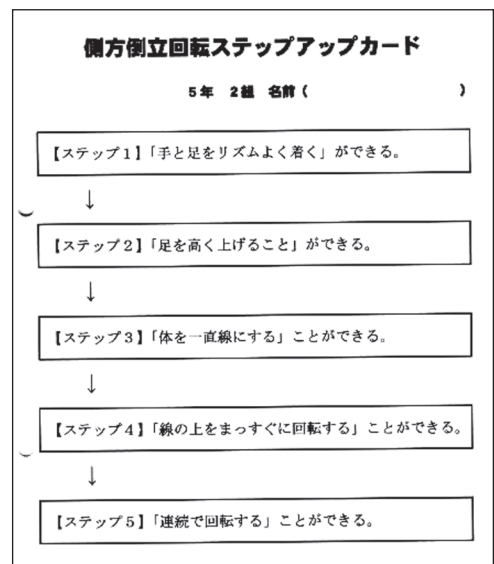
〔仲間とのかかわり合いの場面の設定〕

児童は自分の力に応じて練習を取り組み、レベルアップを目指す。その際、「児童相互」の補助や声かけや用具の使い方の工夫によって、より効果的な練習となるようにした。特に、側方倒立回転の練習では、できない場面の補助の仕方や運動のポイントのチェックの仕方、どのような用具を使えばいいのか話し合わせることで、お互いの「かかわり」ができるようになったように思われる。

③単元を振り返って

〔よかった点〕

○「レベルアップカード」を使うことによって、児童のめあてがより明確化された。



【児童の感想】はじめは「ステップ3」ができなかったけど、ゴムひもを使った練習をしたら、できるようになりました。次は、「ステップ4」ができるようにがんばりたいです。

- グループでの教え合いや補助の仕方など、児童どうしのよい「かかわり」が多く見られてとてもよかった。
- スマートボードで動画や静止画を見せたことは、児童がコツを見つけるのに大変有効であった。

〔改善点〕

- 「かかわり」をより高いものにするために、児童同士で技を見せ合う際、「どこで見ればよいのか」という視点を、教師が示す必要であった。
- 「わかる」をさらに深めるために、児童が見つけた「コツ」を掲示し、「コツ」の共有化する必要があった。

(2) 3年生「ポートボール」

①単元について

〔一般的特性〕

ポートボールはバスケット型のゲームである。バスケットゴールの代わりにゴールマンが台の上に立ち、手でボールをキャッチすることで得点が得られるゴール型の運動である。バスケットボールとは違い、ゴールマン、ガードマンの役割がある。そして、これらの役割を上手く行い、仲間と協力してボールを運んで、シュートが成功したときの喜びを共有する楽しさがある。また、ルールを工夫したり、チームで作戦を立てたり、練習したり、協力し励まし合ったりすることにより、楽しさが深まる運動である。

〔児童から見た特性〕

- 運動の楽しさの観点から見ると、次のような特性がある。
  - ・みんなで力を合わせて相手チームと得点を競い合うことに楽しさを感じる。
  - ・シュートが成功したときの喜びは大きい。
  - ・ボールをパスしてもらえないときや、ゲームに負けたとき、失敗を非難されたときに楽しさが半減する運動である。
- 学び方の観点から見ると、次のような特性がある。
  - ・低学年のゲーム領域の学習を通して、ルールやコートを工夫しながらの学習やゲームを行うときの基本的なマナーは経験している。
  - ・相手チームの特徴をつかみ、それに応じた作戦を立てることはまだ難しい。
  - ・仲間との協力はやや不十分な発達段階であるので、ワンマンプレーが出やすい。
  - ・チームで協力して練習したり、教え合い励まし合ったりすることができる。
  - ・勝敗に対する正しい態度やルールを尊重し、それを守る公正な態度を養うことができる。
- 技能の観点から見ると、次のような特性がある。
  - ・投げる・捕るは、低学年のゲーム領域で経験しているが、遊びや社会体育の経験の差によって、技能面で個人差ができる。

②単元を通しての指導

3年生の体育の授業は1・2組同じ時間で行い、運動の特性や安全面などに配慮し、より効果的であると考えられる指導形態をとるようにした。

本単元は、より多くの児童とゲームをすることにより、よい動きをたくさん見つけて実践して欲しいと願い、T・Tで指導することにした。また、児童の実態をふまえ、以下のような手だてをして指導にあたった。

## 【できる喜びを味わうための工夫】

〔スモールステップを取り入れた段階的な指導〕

試しのゲーム、リーグ戦を行って行く中での「パスが上手くつながらない。」、「シュートが上手くできない。」などの児童の困り感から、それを解消していくための指導内容を組み立ていった。単元の前半では、シュートリレー、パスリレーなどを取り入れ、個人の基礎技能を高めることを中心とし、単元の後半では、3対3のゲームを中心に、チームでの集団技能を高めていった。上達のスピードには個人差があるので、それぞれの技能の差を認め、ルールを工夫することでみんなが楽しめるようにした。



パスリレーの様子



シュートリレーの様子

また、ポートボールのおもしろさであるシュートをみんなに経験させるために、「初ゴール制」（メンバーそれぞれが初めてゴールしたときは2点、次のゴールからは1点）、「全員ゴール制」（チーム全員がゴールしたときは、ボーナスの10点を入れる）などのルールを取り入れて行った。

〔「わかる」と「できる」を一体化した指導〕

「わかる」というのは、よい動き方（シュート・パス）について気づくことととらえる。相手のいないところに動く、仲間のとりやすいボールを投げる、山なりのボールでシュートするなど、練習の中でよい動き方について発見させ、ポイントを押さえながら指導していった。そして、児童が気づいたよい動き方のコツを実際にできるようにするために、学習カードや準教科書を使い、めあてをもって練習できるようにした。

〔場作りの工夫〕

3対3の練習では、ゴールマン、ガードマン、最初にボールを投げる人をローテーションで行い、誰もが同じ経験、練習ができるようにした。また、各チームで役割を分担し、協力してスムーズに活動ができるようにした。（キャプテンは振り返りタイムの司会・作戦タイムの司会など）

## 【友達とかわりながら学習するための工夫】

〔チーム編成・仲間とのかかわり合いの場面設定〕

各学級で等質なメンバー（6～7人）で4チームずつを編成し、各学級で兄弟チームを設けた。そして、各チームで等質になるように3対3のメンバーを児童に決めさせ、3対3の練習の時には常に同じメンバーで行わせた。その結果、チームの中で、試合や3対3の練習中に気づいたことをお互いに伝え合ったり、どのように動くときよりよいのかを考え、話し合っただけで練習したことができた。また、これらの話し合いをもとに作戦を考えていった。また、兄弟チームの中で同じ係の人をペアとして、試合の様子を見合ことによって、相手のよかったところや気をつけるといいところなどを伝え合うことができ、しっかりと相手の動きを見ることが、自分が動くときのヒントとなった。

### ③単元を振り返って

〔よかった点〕

○児童自身が上手なパスの仕方として、「スペースを見つけて動く。」「○○さんの瞬間移動を

まねる。」などの動きのポイントを見つけていった。また、「誰もがシュートを成功させるためにはどのように動けばよいか。」については、以下のような考えが出された。

- ・スペースを見つけて、誰もいないところに行ってボールをもらう。（瞬間移動）
- ・よいパス，とりやすいパスをする。
- ・速いパスをつなげて，ゴールに速く行く。

これらの発言から，どのように動くパスがつながるのかということについて，児童は理解できている（わかっている）と感じられた。

- ボール慣れの運動であるパスリレーとシュートリレーを4チームずつ同時に行い，兄弟チームで交代した。使うボールは兄弟チームで準備させ，共有して使うようにした。パスリレーとシュートリレーでは使うボールの数が違うが，兄弟チーム同士で貸し借りをするため，準備の時間を短縮することができた。また，行う場所を固定し，練習していたので，スムーズに活動することができ，大人数ながら体育館を有効に使うことができた。

[改善点]

- どのように動けばいいのかを確認した後，実際に動いてみたが，「パスリレーの練習の成果で，パスを出した後すぐに動くことはできるが，スペースを見つけることができず，ただ前に走っていく児童」「味方が上手くスペースを見つけて動いたのに，そこにタイミングよくパスを出すことができない児童」「相手のガードをかわすことができず，パスができない児童」の姿が見られた。この事から，わかっているけれど上手くできないという児童が多いことがわかった。これらの児童が「わかる」から「できる」ようになるには，次のような手立てをしてイメージ化させる必要があると感じた。

- ・動きのよい児童の様子を見せる。
- ・ホワイトボードや図を使って，スペースの概念やのつくり方や動きを確認させる

## 7 全校なわとび大会の実践

(1) ねらい

- ①なわとび運動を通して，運動に対する興味・関心を高めると共に，体力の向上を図る。
- ②児童どうしの関わり合いの場とする。

(2) 内容

①長縄をくぐり抜けたり，跳んだりする

- ・各学年内4色対抗。一人一人が縄をくぐり抜けたり跳んだりした回数で競う
- ・1，2年生：かぶり縄クロスのかぶり抜け（3分間）

※6年生が縄を回したり，アドバイスなどをする。

- ・3，4年生：8の字跳びのかぶり縄（3分間）
- ・5年生：交差8の字跳びのかぶり縄（3分間）
- ・6年生：X跳（3分間）

②長縄：各学年内4色対抗全員跳び（みんなでジャンプ）

- ・時間内に跳んだ回数の合計で競う。（1年生は1分間，2年生は1分30秒，3年生は2分間，4年生は2分30秒，5年生3分間，6年生は3分30秒）

③6年生の短縄・長縄のデモンストレーション

- ・6年生が短縄・長縄の技（二重跳びやはやぶさ，ダブルダッチ）を全校の前で披露する。

(3) 全校なわとび大会の実践を振り返って

[よかった点]

- 練習段階や本番での活動を通して，なわとび運動に対する興味・関心が高まり，休み時間などに進んで運動する児童の姿が多く見られた。

○本番では、高学年が低学年の児童にアドバイスをしたり、一緒に手をつないで跳ぶなど、児童どうしの温かな関わりが見られた。

[改善点]

○いろいろな運動を経験させたり、楽しさを味わわせるために、なわとび以外の運動に触れることができるような場を設定する。

○なわとび大会において、児童どうしの関わりがより深められるような内容や場の設定を考えていく。



## 8 研究のまとめ

本研究では、以下の目標を掲げ実践を重ねてきた。

- ①体育科の授業において、児童が自ら課題を見つけて主体的にその課題に向かって取り組み、できる喜びを味わい、友達とかかわり合いながら学び合う授業を創造する。
- ②運動に対する興味・関心を高めると共に、体力を向上させるような体づくり運動の取組みを行う。

その成果と課題は次のような点であった。

### (1) 成果

○児童が課題を設定する場面において、「ステップアップカード」などのカードやワークシートを準備したことは、児童自身が自ら課題を見つけるために有効であった。

○できる喜びを味わうための工夫として「基礎感覚づくりを取り入れた導入の工夫」「『わかる』と『できる』を一体化した指導」「場作りの工夫」を授業に取り入れたことより、児童はこれまで以上に楽しく、そして意欲的に活動しながら、技を習得していくことができた。

○友達とかかわりながら学習するための工夫として、グループの編成を考慮したり、児童相互の補助や声かけをしたり、用具の使い方を相談したりすることによって、お互いを高めるための「かかわり」ができるようになったように思われる。

○なわとびでの活動を通して、なわとび運動に対する興味・関心が高まり、休み時間などに進んで運動する児童の姿が多く見られた。

### (2) 課題

○なかなか技を習得できない児童に対して、単元構成や1時間の学習過程に柔軟性をもたせ、個へのこめ細やかな対応について、さらに研究していく必要がある。

○児童が技や動きを習得するために、ワークシートや教材・教具の工夫について、さらに考えていきたい。

○本研究を通してめざす子ども像に迫るために、単一の学年ではなく、6年間を見通した体育学習のつみ上げが重要であることを再認識させられた。

### 【参考文献】

- ・「学年別・到達目標のある学習カード小学3～4年生」根本正雄監修（明治図書）
- ・「側方倒立回転 新ドリル」T O S S 体育根本正雄企画 浜井俊洋著（明治図書）
- ・「わたしたちの体育5年」（文教社）